

全国高校総体 **セイスポ** ベスト4



星槎スポーツ新聞

第14号 ★ 2017年9月7日(木)

星槎グループ セイスポ編集部発行
神奈川県 中郡大磯町国府本郷 1805-2

星槎国際湘南 女子サッカー部



味方の得点に歓喜する応援団

平成29年度全国高等学校総合体育大会女子サッカー競技大会(インターハイ)が宮城県で行われた。この大会は全国各地で予選を勝ち上がった16チームが日本の高校女子サッカーの頂点を目指す大会となる。

星槎国際湘南女子サッカー部は3年連続神奈川県予選で優勝し、関東大会に進出した。関東大会でも2年連続で優勝を果たした。連続優勝は関東では初の快挙であった。そして、2年連続で関東第1代表としてインターハイに臨んだ。

昨年は1回戦を勝ち抜き、2回戦で敗れている。今年度は、まずはその結果を越えることだ。

関東大会連続制覇の実績を携えて臨んだ初戦

初戦は福島県私立桜の聖母学院高等学校だ。当日は星槎国際仙台と星槎国際郡山の生徒と先生が駆けつけてくれた。炎天下の中、星槎国際湘南女子サッカー部の応援を一緒に行なってくれた。試合の立ち上がりは初戦ということもあり、少し硬さもあったが、時間が経つにつれて、少しずつ星槎がボールを支配し、相手ゴールへと得点を奪いに行こうとする。しかし、ボールをただ回しているだけとなってしまったため、チャンスメイクが生まれ

ずいた。相手の動きを見ながらプレーをするようにベンチから声が掛かった。その声から相手の懐を付き、シュート本数が徐々に増えてきた。ホイッスルが鳴った時には、3得点を挙げて前半を折り返した。ハーフタイムには「プレススピードを上げることが監督の柄澤から伝えられた。後半は相手も引いて守り固い守備をしていたが、2得点を挙げ合計5対0で勝利した。

強豪常盤木学園高等学校との戦い

2回戦は宮城県私立常盤木学園高等学校だ。全国制覇を目指すうえで「第一関門」。選手たちもウォーミングアップから強い気持ちで臨んでいる様子が見えた。試合開始早々から、相手ボールを奪い勢いに乗る星槎国際湘南。前日の反省を踏まえプレススピードを上げてプレーをするようになっていた。ボールを支配しながら相手陣地でボールを保持する時間が増えた。チャンスが幾度となく訪れ、星槎国際のボールが常盤木学園のゴール前で展開された。試合が動いたのは、前半8分。相手を崩しクロスから得点を奪い常盤木学園のゴールを揺らした。立て続けに追加点を奪い2対0で前半を折り返す。

後半、その勢いそのまま相手ゴールを攻



決戦に臨むイレブン

めようと試みるも、ここで優勝経験のある常盤木学園の力を見せつけられた。相手の力に圧倒される流れとなり、一瞬のミスで突かれロングシュートを相手に決められると、そのまま形勢を立て直すことが出来ずに苦しい時間帯が続いた。星槎国際の選手たちが慌ててしまい、ペナルティーエリア付近で相手にファールを与えてしまった。それが直接ゴールへと入り、2対2と同点に追いつかれてしまった。ここで負けるわけにはいかないうちに星槎国際湘南女子サッカー部。ピッチ外からも応援団から熱い声援が送られてきた。それに応えるかのように反撃に出るも、前半ほど攻撃することが出来ずにDFを中心に身体を張ってゴールを守ることで精一杯だった。守備陣の厚い壁により2対2の同点で試合は終了し、そのままPK戦へと突入した。

手たちは笑顔で再びピッチ内に戻った。選手たちはこの状況を楽しもうとしている様子に見える。トーナメント方式だから次はない。そんな窮地に立たされている中で、自分たちの可能性を信じた選手。落ち着いてゴールを決める。さらに星槎GKが相手のシュートコースをしっかりと読んで2本止めPK戦を4対3で勝利した。この結果により、歴史を塗り替えたと共に全国ベスト4へ進出を果たした。



高校総体3位の賞状とメダルを胸に

背中を追い続けた藤枝順心高等学校との一戦

準決勝は静岡県私立藤枝順心高等学校だ。日本一にもなっている実績がある強豪校である。準決勝を行なった場所は2002年の日韓ワールドカップでも使用された「ひとめぼれスタジアム宮城」。最高の条件の中で試合が行われた。前半から相手のプレッシャーにより自分たちのプレーが出来ず、自陣での試合展開が続いた。また、相手のスピードのあるプレーに圧倒され、引き気味で守備をしてしまったために立て続けに失点を許した。あっと言う間に前半が終わり、0対3となっていた。後半、気持ちを入れ直し臨んだ。前半よりは修

正はしたが、相手ゴールの壁は厚かった。後半にもさらに失点を許し、5対5で準決勝敗退となった。「日本」という目標には届かなかった。しかし、全国ベスト4という今まで成し遂げられなかった結果を得ることは出来た。選手たちの表情には曇りひとつなかった。まるで「次の大会に向けた準備をしっかりとしないといけない」という新たな壁を乗り越えようとする表情に見えた。ここまでご声援いただいた皆様へ感謝申し上げます。今回の結果を得ることが出来たのも星槎の仲間や関係者の皆様あってのことだと感じております。今後ともご声援をお願い致します。

未来に向けて
スポーツを超え

ブータン王国から アーチエリーのリオ・オリン ピアンが9月来日

第1回SPS Handa Cupが愛知県岡崎市で全日本アーチエリー連盟によって開催される。9月16日(土)に個人戦、翌17日(日)は団体戦が行われ、全日本代表チームの強化合宿も兼ねている。星槎グループは全日本アーチエリー連盟と共同し、ブータン王国からリオオリンピックに出場した女子アーチエリーのカルマ選手他3名、そしてエリトリア留学生、西湘地区夏季陸上競技大会で好成績

エリトリア留学生、 西湘地区夏季陸上競技大会 で好成績

7月16日(日)、小田原市の城山陸上競技場で高校生の「西湘地区夏季陸上競技大会」が開催され、エリトリア留学生、デジェン君とアヌール君が、星槎の同級生と一緒に出場し、5000mを走った。デジェン君にとっては怪我から回復後初めてのレースで練習も不十分かつ

温32℃で湿度も高い悪条件の中、積極的にレースを引っ張り1位でフィニッシュ。タイムは15:34.85。アヌール君は16:13.33のタイムで3位、5000mは初の完走だった。夏の合宿を経て、今後は秋の記録会やロードシーズンが控えている。二人の成長を応援していきたい。

エリトリア、世界陸上 2017ロンドンに出場

デジェン君、アヌール君の母国、エリトリア。2015年世界陸上北京大会における男子マラソン金メダル獲得も記憶に新しいが、8月4日(金)から13日(日)にかけて開催されたロンドン大会でも、星槎グループと世界でも財団が参加支援を行った。残念ながらメダル獲得には至らなかったが、男子マラソンではY.ゲブレゲルギシ選手が7位入賞、男子5000m決勝でもA.キフレ選手が7位入賞を果たした。陸上競技におけるエリトリア選手の活躍は今後ますます期待される。

フィリピンサッカー女子 代表チームの合宿を 箱根キャンパスで実施

星槎グループではサッカーを通じた国際支援も活発に行っている。2017年6月に北マリアナ諸島女子代表、7月にはブータン王国男子U-15代表チームの合宿受け入れ支援を相次いで行った星槎箱根仙石原スポーツクラブでは、続いて8月1日(火)から9日(水)にかけて、フィリピンの女子代表チームを受け入れ、なでしこリーグのチームや神奈川県国体成年女子チームとのテストマッチ等も実施した。一連の国際支援を通じて日本サッカー連盟(JFA)との協力体制もより確かなものとなった。

ニュース速報

全国高等学校定時制通信制体育大会

全国高等学校定時制通信制体育大会において、ソフトテニスで東京都の代表として出場した八王子学習センター3年の岩上希海と松井海南江が団体と個人ダブルスの両方で優勝した。

また、柔道個人では富山学習センター3年の清水建稀が男子75kg級で準優勝、陸上競技では福岡中央学習センター1年の吉嗣楓が女子3000mで6位入賞を果たした。バドミントン団体戦では、富山学習センター2年の林れなが富山県代表として出場し、ベスト8。詳細は次号で。

星槎道都大学駅伝

8月19日(土)に行われた第49回全日本大学駅伝対校選手権大会北海道地区予選会は、8チーム出場で101.06kmを8区間で襷を繋ぎ、優勝チームが2017年11月5日(日)に行われる本戦の出場権を手に入れる。星槎道都大学はエントリー8区間ギリギリのメンバーで、アンカー(8区)には、エリトリア国でマラソン記録を持つヤレド・アスモン・テスフィット選手が控えるオーダーで臨んだ。

結果は、本選出場はならなかったが、昨年より一つ順位を上げ3位で襷を繋ぐことができ、総合タイムも去年より20分20秒短縮できた。来年こそは本戦出場できるようチーム一丸となって頑張っていく。

第55回 全国高等学校 ライフル射撃競技 選手権大会

平成29年7月30日に広島県つづがライフル射撃場で、第55回全国高等学校ライフル射撃競技選手権大会が行われた。強豪校が集う九州高校選手権を大会新記録で優勝し、全国大会への出場を決めた星槎国際沖縄の喜納夕莉がチーム・ライフル立射40発競技に出場した。

沖縄県代表として一緒に出場する興南高校の生徒と共に、会場の雰囲気になるべく早く慣れるよう開会式の2日前には試合会場のある広島県に入った。試合会場で練習を重ね、万全の状態です。

まい、集中できなかった。また普段練習している沖縄の施設と、試合会場の施設のの違いに最後まで慣れなかった。」と、精神面での課題をあげていた。射撃を始めたきっかけは、中学校1年生の時に自宅近くにある沖縄県総合運動公園で開催されていた、スポーツレクリエーションイベントで、チームライフル射撃を体験したことであった。

高校1年生の夏から大会に出場し始め、今はほぼ月1回のペースで大会に出場している。次は、8月19、20日に長崎で行われる「第72回国体九州ブロック兼九州選手権大会」に出場する。喜納は「目標は九州選手権大会で優勝することと力強く語った。今回の大会で、9月に行われるジュニアオリンピックの出場も決めている。練習においての自己ベストは422

点。日本記録の423点に近づいており、今後練習を重ね、各種大会に出場して経験を積むことで、さらなる活躍を期待したい。

まだ見ぬ景色を 見に行く旅



攻めを前に陣を組んで

全国大会への切符を掛けた大会前夜、選手たちは各々の決意表明を述べた。「まさかここまで野

球ができるとは思ってなかった」と皆口々に話す。それもそのはず、4月には3年生3人の状態

星槎東京立八軟式野球部

から始動したチーム。「去年で燃え尽きた」という者、「定通の大会では本気になれない」という者、「ルールが分からない」という者……。グラウンドに顧問と選手2人で活動したこともあった。技術の差が大きく「やっつてられない」と経験者も未経験者も双方の心が折れそうにもなった。それでも何かの縁が働き、人が集まり「ここまで」野球を続けられることが出来たことは本当に奇跡的な出来事であると思う。

「まだ見ぬ景色を見に行く旅」はまだまた続く。全員で束になって大金星を狙う選手たちの表情は鬼気迫るものを感じる。3年生にとっては最後の大会。一日でも長く高校球児でいよう。応援よろしくお願致します。

そんな中で東京都予選がスタート。全員でがむしゃらに食らいつき、とにかく試合を「成立」させることに集中していた。試合を重ねていく中で選手たちは少しずつ「チーム」になっていく。ピンチを全員で防ぎ、1年生が高校初ヒットを打てば全員が盛り上がった。それ

からというものの、休日でも上級生が1年生の練習に付きっきりで面倒をみてくれるようになった。徐々に競技者としての厳しさや、仲間を想う気持ち芽生え、表情が変わっていきのびやかになった。全国大会への出場権が決まる準決勝戦では、初めて「勝ち負け」を意識した。勝てば全国、負ければ引退というプレッシャーの中、選手たちは見事勝利し全国への道を拓いた。「星槎」という看板を背負い全国大会に出場するからには半端なことではできない。今夏、行われた全国強化合宿では、ルールやサインプレーが曖昧な選手に対して「野球塾」が開催され、夜遅くまでミーティングが行われていた。すべて選手が自主的に行ったことだ。本当に頼もしいチームになった。

星槎国際東京としては、小治慶多

Back to Hokkaido with Gold Medals! 道都大学



高橋北海道知事を表敬訪問

くれた。だから、大会でたくさん金メダルを獲得するための実力と自信をつけさせてもらえた」と語る。

滞在中は、練習のほか、国体の北海道予選を見学に行ったり、本学の大学開放DAYで大勢の北広島市民から激励を受けた。たくさんの方の経験も積んだ。北海道名物の「ジンギスカン」にも挑戦！もちろん、もちろん、北海道の食文化を堪能したことは言うまでもない。

その中で、国際親善大使としての役割も果たし、北広島市の上野市長への表敬訪問では市長から「是非、大会で金メダルを獲得してほしい」と激励の言葉をもらった。

また、2020年の東京オリンピックピックパラインピックを契機に、海外との交流を図るホストタウンの推進や合宿誘致の推進を図る北海道の高橋知事との面会も実現した。知事からは、大会への激励の言葉のほか、北海道での1ヶ月間の暮らしぶりや食べ物に関する質問があり、選手たちは一生懸命答えていた。「日本語や英語やミャンマー語や英語や日本語」という手間のかかる通訳であったにもかかわらず、面会には終始、和やかな雰囲気で行い、知事からの、今後是非、北海道で合宿を行うって欲しいとのコメントもいただいた。選手たちには多少の緊張感もあったものの、国を代表するチームの誇りを感じてきた。北海道の名産品も試食した。北海道の食文化を堪能したことは言うまでもない。

ローリング療法とは

ローリング療法とは、各種のローリング器を使って、体全体にできたしこり(硬結)をくすぐったさ(擦感)で、鬱血を除去することで、筋肉や関節の動きを正常にし、全身及び局所の血液循環障害を改善して、病を治癒に導く療法だ。

オピニオン
星槎国際湘南野球部
トレーナー
松山学
(鍼灸師・ローリング療法士1級)



(まつやま・まなぶ)プロフィール
東海大相模高等学校野球部出身。元S1級選手。2011年、2012年、2013年、現在、自宅にて一般の方をはじめ、競輪選手、高校野球、極真空手、サッカー選手などをローリング療法及び鍼灸にて治療を行っている。また、日本競輪選手会神奈川支部の専属トレーナーとして、レース前後のコンディショニング合宿などに帯同している。

ローリング器で人体をくまなくローリングすると、体中にたくさんのしこりを見つけたことが出来る。しこりの形状は実に多種多様で、肩こりのコリのような分りやすいものから、体の奥深くの筋肉にできてくるもの、皮膚表面、関節の隙間、耳たぶ、指先にできるものなど実にさまざま。特に、皮膚表面や耳たぶ、指先などのしこりは、ローリングをしてみないと発見が難しいほど細かいもの

ののだ。
しこりのできる原因は、ストレスで身体にいつも余計な力を入れている為に筋肉が慢性的に疲労している為や、内臓病変の反射怪我の後遺症、疲労、スポーツ後の筋肉痛の放置等、いくらでもあるだろう。できたしこりは自然に回復してくれるものもあるが、いつまでも身体に存在すると、色々な症状の原因になる。

身体には、それぞれに対応した反射区がある。最近では良く知られるようになった足の反射区はその代表例だが、そのほか、手、頭部、耳部、胸部、腹部、背部、臀部等、各所に有り、それぞれの疾患に対応した部位にしこりが発生している。

この様にローリングしなければ解らない感覚、ローリングしなければ見つけられないしこりの存在、それをからだに持っている為に色々な病気や痛み、身体の不調が起きているのだ。筋肉は第2の心臓、皮膚は第2の脳ともいわれている。第2の心臓のしこりを取るために、第2の脳の擦感を除去するためにローリング療法は存在している。

野球部 秋季大会に 向けで

新チーム始動

7月23日、全国高等学校野球選手権神奈川大会5回戦、対日大高校。この日、3年生の夏が終わった。3年生にとって本気で戦うのはこの日が最後となったわけだが、その最上級生の背中を見ていた1、2年生は果たしてどのような感情を抱いていたのだろうか。無情にも哀しんでいる時間も落ち込んでいる時間もない。なぜなら秋季大会が3週間後に迫っているからだ。この秋季大会はただの大会ではない。勝ち上がれば来春行われる全国選抜大会(春の甲子園)への出場権が得られる大事な大会だ。つまり、すぐにでも気持ちを切り替え、夏の敗戦を糧として練習に臨む必要があった。3年生とはもう野球ができない空しさ、あの場面で自分が結果を出していたらという悔しさ、そして3年生の想い、いろいろなものを胸に敗戦から2日後、新チームがスタートした。

スタートして早速、金子(前主将)の偉大さに気付かされる。チームを引っ張っていく存在がいないのだ。本来、夏のベンチ入りした2年生メンバーから頭角を現してくるところなのだが、それが出てこない。小倉や松下が一生懸命に取り組もうとしている姿は見られるのだが、やはり金子の存在が強すぎたためか、なかなかチームが締まらない。それでも一体感はずっと前チームよりも感じられた。絶対的なエースの本田が抜けた今、個々が担っている役割を遂行できないければ勝つことができないという現状を理解しているからだ。やろうとする気持ちがないわけではなく、やり方がわからないと、いったん新チームのスタートだった。力はまだ無いが気持ちは前を向いており、伸び代に期待が持てる。そうだと私の第一印象だった。

8月に入りオープン戦が始まった。本田が抜けた投手陣はまさに打たせて取るタイプなのだが、守備陣がそれを支えきれない試合が続いた。打ち取った打球をアウトにできなかったり、捕手が

けた今、個々が担っている役割を遂行できないければ勝つことができないという現状を理解しているからだ。やろうとする気持ちがないわけではなく、やり方がわからないと、いったん新チームのスタートだった。力はまだ無いが気持ちは前を向いており、伸び代に期待が持てる。そうだと私の第一印象だった。

に決した。優しい面と厳しい面の両方を持ち合わせ、仲間に対してストレートに気持ちをぶつけることができる。そして強者に向かっていく心を持っており、言葉よりも背中チームを引っ張っていかれることを期待している。自分勝手な面も多少あるが、それも最近減ってきた。成長している証だと信じている。

前チームに比べて総合力では劣っているが、気持ちの強い子が新チームには多く、一体感もある。今は弱いかもしれないが、大会を通じながら成長し、星槎国際湘南として何度でも大きな波を起こしたいと思っている。

星槎 教師 列伝

ラグビーを通して 大いに学んだ 星槎国際高等学校 沖縄学習センター 比嘉 栄樹



比嘉栄樹先生

ラグビーを始めたのは高校1年生の時。入学当初はバスケットボール部への入部を希望していたが、入部直前でラグビー部の監督から「お前はここだ！」と言われた。その後、父から電話が入り「ラグビー部の部室へ行きなさい」との一言からラグビー人生が始まった。

高校時代は全国高等学校ラグビーフットボール大会、秋田国体少年男子ラグビーフットボール競技に出場。主将も務めた。大学時代は関西大学Aリーグで3位、社会人では第45回名護市長杯争奪ラグビーフットボール大会(大学一般)で優勝を果たした。

ラグビーをしていて嬉しかったことは、大学時代の遠征。強豪チームが集まり、注目選手や高校の時の先輩後輩も集う。食を目的に無邪気な笑顔で先輩後輩の関係をなく会話を交わせたことは一番印象に残っており、後輩にも先輩にも恵まれたことが一番嬉しかった。

辛かったことは、夏になると長期合宿がある。午前中は肉体的運動と走力的練習、午後は強豪チームとの練習試合。この1日のサイクルが、約3週間繰り返される。体力的な疲労は凄まじく、疲労骨折や熱中症等でリタイアする仲間もいた。僕自身は、試合中に脳震盪を起し、大学2年の夏合宿の記憶が未だに戻らない。

しかったことは、大学時代の遠征。強豪チームが集まり、注目選手や高校の時の先輩後輩も集う。食を目的に無邪気な笑顔で先輩後輩の関係をなく会話を交わせたことは一番印象に残っており、後輩にも先輩にも恵まれたことが一番嬉しかった。

い。医者の話だけが記憶に残っており、「脳が腫れています」と言われた。印象に残っている試合は大学時代、翌週に早稲田大学との公式戦を控え、キャプテンとして出場した関西学院大学との試合。雨天試合となり、後半立て続けに2本連続トライを奪われ、平常心を失いかけた僕は100%の力で敵にタックルを入れてしま、敵の膝が僕の顔面左側部へ直撃し、激痛でその場から動くことができなかつた。さらに流れが崩れ、立て続けにトライされるなど20点差以上に、初めに試合中に悔し涙を流した。翌日、病院へ行くことと眼底骨折と診断

され、ドクターストップとなり、早稲田戦を待たずに最後の試合となった。星槎の部活動・スポーツ専攻については、「子どもたちが活躍し成長できる場があるのは教員として嬉しい。また、全国の舞台や海外への遠征を通して、そのピッチに立った時にしか味わえない気持ちがある。その気持ちをもちたらしめてくれる背景には『何が』『誰が』など、様々な人が動いていることを知る機会にもなる。勝負の世界ではあるが、スポーツを通して何を伝え、どのように成長させたいか、その環境づくりや機会作りとしては最高の場だと思っ。」と話してくれた。

セイスポ

関東私立高等学校 男女バレーボール選手権大会 連続出場



関東私立高等学校男女バレーボール選手権 開会式



さあ、出陣

第25回関東私立高等学校男女バレーボール選手権大会に今年で二度目の出場となった。昨年は、初めての出場で、緊張もあり会場の雰囲気にも慣れてしま、予選リーグ戦で3敗。決勝トーナメントには進めなかった。自分たちが練習してきたことが、全く出せずに終わりとともに悔いが残っていた。

出場することを目標にした。ベンチメンバーは、益山珠世、笠原美優、島村美帆、南百恵、浜館加那子、東尾陽菜、八田花梨、市倉みなみ、宮田香澄、小島梨奈、玉城優羽、馬場晴海、天野愛美、田中彩夏の14名だ。スターティングメンバーは、レフト市倉みなみ、宮田香澄、センター益山珠世、笠原美優、ライト

天野愛美、セッター小島梨奈、リベロ八田花梨で臨んだ。予選は4チームのリーグ戦。一回戦目、千葉県代表昭和学院高校戦は、25対12、25対11で勝利した。スタートから星槎の笠原のサーブが走り、いい流れが残っていた。

れて試合を運ぶことができた。ピンチサーブで、3年 南百恵が出場し、さらに星槎のリズムを作り勝つことができた。失点も少なく無駄のないバレーが展開できた。

二回戦目、栃木県代表白鷗大足利高校戦は、25対12、25対11で勝利。1試合目のいい雰囲気のまま試合が始まり、八田のレシーブからリズムを作り、セッター小島を中心にコンビを展開し、ストレートで勝つことができた。1年ライトの天野の時間差攻撃も決まり、とてもいい流れだった。三回戦目、東京代表淑

徳SC高校戦は、25対22、25対22で勝利。淑徳はレシーブのいいチームなので、攻めるバレーをするのを意識し、スタートからSC中盤までシーソーゲームのような展開だったが、後半にかけてキャプテンの益山が力強いスパイクを決め、チームにいい流れを作った。このプレーをきっかけにチームに勢いがつき、2年生の市倉、宮田も連続で得点を取ることができた。

結果、予選リーグ3勝0敗で、決勝トーナメントに出場することができた。2回目の出場ということもあり、大きな体育館での試合にも慣れ、緊張せずに自分たちの力を発揮することができ、目標を達成することができた。

前回は優勝校の埼玉県代表細田学園との戦いだ。スタートで細田学園にリードされたが、中盤まで必死に頑張った。粘りのあるバレーをするのができた。細田学園は高さがあって、身長が低い星槎はスピードで勝負した。センターの益山、笠原の速攻攻撃に、ライト天野の時間差攻撃を展開し、レフト市倉、宮田の幅を使った攻撃を展開。結果は敗れたが、自分たちのいいところはたくさん発揮できた。

今年の課題となっていた「サーブカットの返球率」は少しずつ練習の成果が出てきている。次の大会は3年生にとって最後になる、春高予選だ。今まで負けた悔しさをこの試合で絶対に結果を出せるようチーム一丸となって頑張る。そして、最後は笑って終われるよう残りの少ない日々を大切に、日々練習に励んでいく。

男子サッカー専攻 K2リーグ戦 近況



背番号10重松がゴールを狙う

前期最終戦
湘南学院高校

後期初戦
法政第二高校戦

7月15日、2連勝で迎えた前期最終戦。対戦相手は3位の湘南学院高校。現在勝ち点11で5位につく星槎国際湘南。今日の試合は何かでも勝ち点を取り、上位に食い込みたいところだ。前半から星槎は厳しく守備をすることで相手に思うようにプレーをさせない。

前線から集中した守備で前半は相手のシュートを0で抑える。中盤でボールが動く効果的にサイドから攻撃を図る。しかし、最後の精度に欠き、得点を奪うことができない。スコアレスのまま後半に突入した。後半、星槎は全体的に運動量が落ちたことと交代した選手が上手く噛み合わずリズムを崩し、相手に押し込まれる場面が増える。しかし、相手の波状攻撃をGK佐野を中心に集中して守り試合は終盤へと進む。途中、MF重松やDF益山、MF藤浦らがビッグチャンスを得るものごとくゴールを奪えないでいた。すると、試合終了1分前、ロングスローからMF渡辺が放ったシュートが惜しくもバーを叩く。そのこぼれ球を詰めきれずカウンターを受けてしまい、終了間際に痛恨の決勝点を奪われてしまう。0対1で惜敗し、3連勝とはならなかった。

他会場の結果により、順位変動はなく10チーム中5位で前期を折り返した。後期の1試合目となった7月23日の法政第二高校戦。前半立ち上がりは一進一退の攻防が続く。両者ともに激しい球際の戦いが続く。前半11分にFK獲得。MF斎藤(美)がヘディングでそのまま得点ならず。前半14分中央を崩され、法政が裏に抜け出すもオフサイドで救われた。前半25分、法政に跳ね返されてカウンターを受けるもMF重松が体を張ってクリアした。前半30分にMF斎藤(美)がドリブルで突破して法政に倒されてFK獲得。MF重松が良いボールを蹴るもキーパーに弾かれた。スコアレスドローで前半終了。後半立ち上がりは攻められる時間が多かった。後半3分に右サイドを崩されるもMF柏木が身を呈してクリア。後半30分にMF重松がシュートを打ったこぼれ球にF藤浦が反応しシュートを打つも法政キーパーのビッグセーブにあった。後半35分右サイドを崩されヘディングで決められ失点。後半40分に鈴木のロングスローでチャンスを作るも得点ならず。0対1で試合終了。後期初戦を落とした。

試合は7月19日、藤沢八部球場で行われた。対戦相手は栄光学園。最終的には大差での敗北をし、相手との実力の違いを実感する結果となったが、多くの事を学ぶ機会にもなった。この大会が最後の試合となる主将の新井裕貴は、詰まった打球ではあったが、気迫のヘッドスライディングで壁に出た。この気力に満ちあふれたプレーがチーム全員を勇気づけ、厳しい場面でも最後まで諦めず、声を出しながら選手一人ひとりが全力でプレーに取り組んだ。

試合を振り返り、主将の新井裕貴は「最初はメンバーの気持ちバラバラで、試合に出ることができず心配でした。しかし、最後は気持ちを一つにして試合に参加し、楽しむことができたので良かったです。今後は後輩たちが新しい部員を獲得し、明るい野球部の雰囲気を受け継いでもらいたいです。」と話していた。この経験を糧に今後も日々精進し、活発に活動していく。

練習では野球の基本となる「捕る」「投げる」を一つずつ意識して取り組み、どのような場面でも大きな声を出して前向きな気持ちをもつことを心がけた。

試合後の本人コメントは「減量と緊張のせいもあり良くなかったです。全力で負けたのではなく、動けなくて負けたのでめっちゃ悔しかったです。次の目標は、K-1カレッジという大会でチャンピオンを目指したいです。試合には負けてしまいましたが、何よりも応援してくれた友だちや先生たち、協力してくれた会長やジムの人たちが、家族に感謝の気持ちでいっぱいです。」と意気込みと感謝の言葉を述べていた。

第62回 全国高等学校 軟式野球選手権大会 神奈川大会

星槎高等学校軟式野球部は、4月に新入部員2名を迎え、9名の選手がそろい、全国高等学校軟式野球選手権神奈川大会へ出場できた。公式戦に出場することが初めての生徒も多く、緊張感を持って練習、試合に臨んだ。



星槎高等学校軟式野球部

K-1甲子園 2017



K-1甲子園 中村翔

7月29日(土)東京・新宿FACEにて、K-1甲子園2017(高校生日本一決定トーナメント)が開催された。2007年にK-1甲子園が始まってから今まで、のちのチャンピオンやトップ選手たちを多数輩出してきただけに多くのファンが集まり、会場は大いに盛り上がっていた。そんな中、55kg級に星槎高等学校3年 中村翔が出場した。

試合3ヶ月前から増量を始め、普段の食事にプラスして鳥の胸肉を300g食べて体重を7kg増やした。試合1ヶ月前からは9kgの減量を始めた。試合3日前まで、サウナスーツと半身浴を繰り返して測定はクリアした。試合のルールは2分1ラウンドと短い時間で勝敗が決まる。前回の試合で右肩を脱臼してしまい、不安要素を抱えていた。

前蹴りをメインに左フックで相手を倒す作戦で試合に挑んだ。相手は関西のチャンピオン。序盤はお互いパンチとキックの応酬だったが、徐々に相手に攻められ、KO負けで惜しくも敗戦した。試合後の本人コメントは「減量と緊張のせいもあり良くなかったです。全力で負けたのではなく、動けなくて負けたのでめっちゃ悔しかったです。次の目標は、K-1カレッジという大会でチャンピオンを目指したいです。試合には負けてしまいましたが、何よりも応援してくれた友だちや先生たち、協力してくれた会長やジムの人たちが、家族に感謝の気持ちでいっぱいです。」と意気込みと感謝の言葉を述べていた。